

■ 書評 ■

『生命の湖 琵琶湖をさぐる』

滋賀県立琵琶湖博物館編, 文一総合出版, 2011年4月, 本体価格1600円

1996年に開館した琵琶湖博物館。本書はそのアニバーサリー（当初、設置5周年記念であったそうだが、10年ずれ15周年記念となった）として刊行された。31名の当該館学芸員（“元”含む）が心血を注いだ琵琶湖と密接に関わる周辺陸域に関する自然と人々についての研究を解説した書籍である。本書は、以下のタイトルの章から構成されていた；滋賀の大地と琵琶湖のおいたち（第1章）、淡水の生き物1琵琶湖と古代湖（第2章）、淡水の生き物2琵琶湖を取り巻く環境（第3章）、湖を取り巻く環境と生物（第4章）、湖の環境と人々の暮らし（第5章）、琵琶湖の謎と私たちの暮らし（第6章）。

さらに、各章には12本から19本の解説文を包含し、それらをキーワード的に列挙する：（第1章）約400万年前からのゾウを含む哺乳類、植物（花粉含む）の化石によるファウナ・フロラの変遷、火山灰や遺跡を含む地層分析による歴史；（第2章）食資源としての水田の在来魚類と外来魚による影響、ナマズ類・ビワマスの繁殖生態、淡水魚の発声と聴覚、コイ科咽頭歯の形態・機能とその化石を指標にした生物地理、外来種を含む魚類相への人為的影響、国外古代湖（バイカル湖とアフリカ三大湖）の魚類相（チョウザメ、カワスズメ）との比較、繊毛虫に着目した微生物食物網；（第3章）ベントス／プランクトン調査と珪藻、カイエビ類、外来／希少淡水貝類、アシナガバエ；（第4章）水生昆虫相、オサムシ、ミミズ、カワウなど鳥類、河川と土壌・水質（富栄養化など）／里山・森林の復元、林業と樹木疾病／哺乳類との関係、タンポポ・ヨシの生態；（第5章）水稲産業・漁業の歴史と魚類への影響、太平洋と日本海を結ぶ運河構想、運搬の要・丸子船、中国・太湖との民俗比較；（第6章）湖水の水流や循環など物理的性状、リモートセンシングによる水温変化、洪水対策、湖水利用と管理、環境問題と農村、琵琶湖四地域（湖東・

湖西・湖南・湖北）における桶風呂の比較、琵琶湖周辺地域の人口・産業・生活。

各章終りには、それぞれの解説文に密接に関わる当該館の実際の展示写真が掲載され、訪れたことがない方でも当該館のイメージが膨らむことであろう。無論、本書は総合研究の優れた誌上展示か詳細な展示ガイドとなるので、この館の訪問時の振り返り資料や見学用ツールとなる。評者は、残念ながら、琵琶湖博物館には訪れていないので、是非、この本を片手につぶさに展示物を巡りたい。

ところで、評者とこの博物館とはまったく無縁ではない。琵琶湖のプランクトン調査で、本来、鳥獣の体内に寄生する鉤頭虫が複数、非常に良い状態でその調査器具であるネットから得られた。それも2度。ホルマリン液で固定されたそれら標本群の一部が評者のもとに送られ、形態学的に検討し、肉食性鳥類の消化管内に寄生するグループと判明した（浅川・西野, 2012）。ただし、体サイズは全体的に小型で、成熟卵も含まない亜成虫であった。この寄生虫は淡水産の節足動物を中間宿主に、魚類を待機宿主にし、亜成虫は淡水魚（急増した外来魚類も含む）か、これを食べたばかりの水鳥にいる。琵琶湖では第3章でも触れているようにカワウや外来魚が多数生息するようになったので、このような偶然が起きても不思議ではない。約400万年の歴史を誇る琵琶湖も、日本を覆う野生動物や外来種の問題から逃れられない。本書は例外的な湖の単なる解説本ではなく、新興する問題のモデルケースを指し示す書としての位置づけもあるようだ。

引用文献

浅川満彦・西野麻知子, 2011. 琵琶湖湖底における底曳網ベントス調査にて発見された鉤頭虫。酪農学園大学紀要（自然科学編）35（2）：91-94。
（浅川満彦／酪農学園大学）